



共古日録
三十八

Handwritten Japanese calligraphy in various directions, including vertical columns and diagonal lines. Some legible characters include '共古日録' and '三十八'.

Handwritten text in the upper right quadrant, possibly a date or recipient information.

Handwritten text in the middle section, appearing to be a title or address.

Handwritten text in the lower middle section, possibly a signature or additional notes.

Handwritten text in the bottom right corner, possibly a date or location.

Small red stamp in the top right corner.



特別
45
1413
40



あそびあそびするもよきと申す

下帯

○ 帯は美らにひきよはしむるの帯は麻布の如き四五尺に四五寸

に作りし物なり。今世の帯は麻布の如き四五尺に四五寸

下帯は帯にひきよはしむるの帯は麻布の如き四五尺に四五寸

古くは帯にひきよはしむるの帯は麻布の如き四五尺に四五寸

はあつてひきよはしむるの帯は麻布の如き四五尺に四五寸

腰の帯はひきよはしむるの帯は麻布の如き四五尺に四五寸

と申す。又あそびするもよきと申す

白橋の橋物

○ 橋の白きを言ひしは、白き木あり、木あり、木あり、木あり、

人、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

江戸の橋

○ 江戸の橋は、唐人の物なり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、木あり、

空馬鹿

蜘蛛網

○ 空馬鹿の棚は、半井三郎と申す。我空馬鹿と申す。田舎者

と申す。蜘蛛網は、蜘蛛の糸をひいて、蜘蛛の巣を

蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣を

ひいて、蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の

巣をひいて、蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣をひいて、

蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣をひいて、蜘蛛の巣を

此の書もせうせんしたるみ製ひけむりとは
世用の工造りかぶつりたる古の袖の意り
しつろひ本籍移のよらんをもも高にきぬ
長継教せつろく

日本橋の
名

日本橋は慶長い登印の蔵の多ありのめ
来たる橋二枚物の名を入向はつて以て
けん也やあけん等一同に日本橋をよ
の不思議とめせり

日本橋の
唐名

あつと日本橋に高れせ
母の行務あつたけむちつと校に書け我生國山城の

キリシタ
判

國おたこのおの運名ハ新入かたなるは
と書てはつたの橋詰めを五と
一般多生の理ありとの事
のせも
は命をたすけ
をたすけ

日本橋の
名

日本橋は慶長い登印の蔵の多ありのめ
来たる橋二枚物の名を入向はつて以て
けん也やあけん等一同に日本橋をよ
の不思議とめせり

抄の巻目

為るものしは人の多量本籍本は編
いれたるごとく麻本を色々に染めたるを
二多しといふなり

本の名

本は古くより本曾の麻本に信濃にて織り
は武蔵の山ありかくぬの信又と云ふ所の
本有の細布由布女に併の本はこの名に
西名のもの本籍種を特来り賣買す中略本籍
りて本籍大が元年より慶長十九年
四年この名をいふに又或は昔籍
多くて此のものとて麻本にすは是れ
ものも多しなり如何には□に越後

本籍の

山王本
田の

出た
書の手

よりなるは北より越後の國北なり其縁を
あつてわびとも北のものよりなり又異名を本
とも籍ともいふ所も多し信濃本は
細く白し雪まじり本はま濃本はこま
河に流るる出た内裡奉り天子の座
幕布なり九のひら布は九幕進と
也器に記せり今やんをいふ方は本
めいれす以上三の巻目
は多し川多しとて信濃川にて
神田流るる川は信濃川に
神田明井のふり山王信濃の
に慶長とて人々けり近年世
流本す

持乳山

守りこ
改葬の里迄くは塚の有是を持乳山とせしめ
其前にかうしとあり笑ひ是はせうせん塚ともい
し塚の上には社あり塚中に寺あり近年は絶て
無し是は生天塚とせしむる塚あり所をせう
せん塚ともいふ我こそは塚のつはれよと知りたれ武成
國は平也にて心は向ふればとて所を夫つかや山と
はさるる都にありて千手堂あり花をわや笑ひ給
はる幸のまがらひさよとせしむ
馬場のかたはらに極楽寺ありに見えたる是は江戸
の改葬の花園その花字に馬場多太郎と書く三右
衛門とありあり

馬場

川

の多あたりは吹くせうとて死は雪の如きと
言ふせが俄に吹くせうとて死は雪の如きと
たくらももの如し昔人足を見てすは出りこそ
所のあはれのまなは家より手桶にぬりて持行
行事は先立て棋しを持ちぬく
江戸が舞臺の海進能ありあこたを
よし京所へ行道に花川に花をて持ちあ
こたなをせしむるはとていあななを
くれがしとてあひこのま
あにもよよすあひこのま
持とも

海進能

花川

舞臺

江戸の舞臺の海進能ありあこたを

中... 女には... 山... 寺... 高... 貴...

山王の

山王の... 山王... 山王... 山王...

山王の

山王の

山王の

山王の

山王の... 山王... 山王... 山王...

金極
人平す

一町一坪 此二水を以て ありあけのあた 終
に多所にて 金に判す 人向修治野呂の とも 金三也
少多を 次まらぬ 一丈二方一朱 朱中なる 目をも判す
然に 書取 渡す 天正十八年の 年より 東迄 三年
用い 未だ 判自由 にあらず 後藤 隆三 隆三 隆三
京より 判す 一ひの 年より 金の 証を さだめ 支
判せ 然し 金の上 にお判者 是を用 又 近年は
支判 とも 世に ありあけ ありあけ 天正 年中
の 金一 金の 代に 米は 四万 一石 但 びた 四 麦に
あは 是は 三 十年 以前の 一ひ 其 金一 金 見
今 年 あり 一 千 石 見 たり 一 千 石 見 たり

行高
下 必

一町一坪 此二水を以て ありあけのあた 終
に多所にて 金に判す 人向修治野呂の とも 金三也
少多を 次まらぬ 一丈二方一朱 朱中なる 目をも判す
然に 書取 渡す 天正十八年の 年より 東迄 三年
用い 未だ 判自由 にあらず 後藤 隆三 隆三 隆三
京より 判す 一ひの 年より 金の 証を さだめ 支
判せ 然し 金の上 にお判者 是を用 又 近年は
支判 とも 世に ありあけ ありあけ 天正 年中
の 金一 金の 代に 米は 四万 一石 但 びた 四 麦に
あは 是は 三 十年 以前の 一ひ 其 金一 金 見
今 年 あり 一 千 石 見 たり 一 千 石 見 たり

慶長
十一年
大元

御記

面目成にまびれりし
金札を建てる
（唐の書に為これ）
（面目成）

神皇正統記
卷之五
神武天皇

慶長六年日本三十九年少の人衆をよむ神田を司
たり其五を家とせ給ふ
其の外家店つとる慶大なるも南は西にぬいた
すの北は神田の南東は改葬をまつたり

七月
精進

七月の奉成に出入道なして也獄しきしやうま
れることをしりしにせしむる七月十日の暮には
此の人の衆も衆もさるしやけまかしく観衆縁

難共のともありにあひよろこびあるもの法宗なり

一年始田なるを築むる年の七月十日に
中へ入るを築むるにせむ古郷へ入るを築むる

とよみせしむるを築むるにせむ古郷へ入るを築むる

河武隈のちひ川流りてぬりしを築むるにせむ古郷へ入るを築むる

大河東橋の上にてある古郷に成て武隈を下流の

ちちい角田のちを流れて其の古郷に成りてぬりしを築むるにせむ古郷へ入るを築むる

見ゆせむ田流には成るに觀音湯の所に夫中一神田に
大明神貝塚に山王権現極楽田山に愛宕河に
あうちてしりしは是は流るの袖居る共に者成る

由大河東橋
まみだり

御記

年齢
七

好
勝

新
訂
全
集

新
訂
全
集

新
訂
全
集

いぬの文かおたねの髪はいつか袖の袖かき
年々くさるる老いゆく髪をたて半馬のこころ
にそよぎをよめよまはるる髪をたて半馬のこころ
に思ひすゝもさし

お祝の服のたむらとまにさしはら柳枝をけづる
いかに指をさしうら少魚のちたさき
髪にけりぬれたり

いさかなをたぬの刺あしにゆふあしを
新入の髪をたぬとてさし
おは孝のたぬとてさし

見れば草むらの中いたる帯あはれを
其のそよむをたぬとてさし
せし今みればさし

中田の道お本
まこらつた者さし
若信数せよとてさし

こまにめとら里に人ありて
とまにめとら里に人ありて
とまにめとら里に人ありて

とまにめとら里に人ありて
とまにめとら里に人ありて
とまにめとら里に人ありて

大平をたぬとてさし
慶長年中家康公原能をたぬとてさし
川原のたぬとてさし

栴檀

栴檀は異名多し木練木浴栴檀一は栴檀なり
幸栴檀は古来はちりし栴檀は近年出まら
か火の事と云ふは栴檀の多なるを遺るに大なる
しむべし有火の栴檀の自愛護の事なり
ほろびしての栴檀をいなる事すめをばいふ
のひも

遊女

遊女の多に云くは女の数をいふは遊女
と云ふは遊女をいふは遊女の多に云くは
而奇は遊女をいふは遊女の多に云くは
し然るは遊女の多に云くは遊女の多に云くは

行人

慶長三年のし行人のり来りて神田の原火塚

江戸
出口
あり

の本に云くは江戸の火塚をいふは江戸の
塚本に樹をいふは行人の多に云くは
せり樹をいふは行人の多に云くは
この事を知るは行人の多に云くは

刀

刀の多に云くは刀の多に云くは刀の多に云くは
刀の多に云くは刀の多に云くは刀の多に云くは
刀の多に云くは刀の多に云くは刀の多に云くは
刀の多に云くは刀の多に云くは刀の多に云くは

火
塚
原

火塚原の事なり

大方袋みろくろめがたぬきも
若くもてらひ舟楫のきりきり
鳴次 天中の子 鳴次 のてら

鳴次 天中
鳴次 天中
鳴次 天中

共古
共古
共古

二上巻の十妙

武家なるものは前記の中
しものそとをいひしるは
粗いのである花木と
雅なものは木也すと
字々格のなは木也すと

いよあしじ 大格の火子格の
段ありの二本格の
はしあし格がえまの
室の平書等の
すすの格
キリシタ
鳴次 天中の
鳴次 天中の

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

貝島島新の
 日記の勝記に
 宇都宮の家の
 多きは床の
 とあり

刑部あじの太道は海のものなり
 其也
 慶長見聞録は為書とて説あり然し為書にハ速同年ニモ
 以有る事多し其光り様は速同年ニモ
 書に記す中事都にハ道ハ
 一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

此の意物言の直
り言はるる虚な

あの人「知りしるありし」といふは、
いふ人「知るべき事なき」といふは、
今よりわきまをききしるべき事なき
と起すは、しるべき事なきと起すは、
実よりなきしるべき事なきと起すは、
是れは、人の心なきと起すは、
まゝありしと起すは、其の心なきと起すは、
此の意物言の直り言はるる虚な

蛇の瘻石

蛇の瘻石 二足の蛇が互に其尾を瘻ひ合ふたは
是れは、相對を以て相對を同縁とめて、絶對とあるは、
是れは、相對の絶對とあるは、



一 不変不動なるを考へて、斯くは真理は不変不動なり、唯
なるを思ふべきなり。一 グラトリー
二 永久の動を考へて、斯くは宇宙なるの真理は、無常の

活動なると思考せよーアリストテレス

三 互に強弱を以てしんが故に争うたると考へて斯くも其非論

四 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

五 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

六 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

七 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

八 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

九 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

十 互に強弱一般に定むる故に斯くの如き思想は生じ来り

右記平ら美善慈愛極論素徳の返明。出づ共方ふと論じ

此の如き人なるものを見せし人なりと云ふは

故に大宇宙の有りたり大宇宙の有りたり

いふは善し大宇宙の有りたり大宇宙の有り

零に零を棄せよ一を生せよ一有て二を生ず

無も成徳の年れを以て一有て二を生ず

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

此の如き人あり又此の如き人あり大宇宙あり

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後
越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後
越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後
越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後
越中 越前 越後 越中 越前 越後 越中 越前 越後

江戸橋の文所

一東慶寺の文所

一石中寺の文所

一六井の文所

一五子橋の文所

一石中寺の文所

一橋本寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

一石中寺の文所

重刻名数出来 東海道名数出来 筑前管出来 多田名数出来
香近山幸出来 昌泉出来 堀中 高宮出来 志麻出来
照方出来 比水出来 早神出来 名室出来
女前名出来 香近出来 法名出来 高切出来 結世出来
澤方出来 都路出来 通念出来 櫛名出来
武陽管出来 成田出来 小川出来 大草出来
多田出来 下七出来 下道出来 女園出来 志麻出来
古代出来 比水出来 志麻出来 志麻出来
四代出来 堀中出来 堀中出来 堀中出来
見代出来 堀中出来 堀中出来 堀中出来

本郷の
の娘

本郷の
の娘

本郷の
の娘



月持板

子規の道

今年
の
月持板

本郷の
の娘

今年
の
月持板

二七
昭和四年五月
十日

雷鳥

城に家々見ゆり

世に雷の歌を張るものあり

白山の如きかげやかくらひくやまの山ありて雷のなるものあり

雷鳥と云ふものありと鳥の言はれは鳥の言はれは鳥の言はれは

鳥の言はれは鳥の言はれは鳥の言はれは鳥の言はれは

雷鳥一名ラヒノドリ 雷鳥の言はれは鳥の言はれは鳥の言はれは

軒小鏡に雨雉ヲ引テ 鶺鴒鶺鴒の言はれは鳥の言はれは鳥の言はれは

見ユタリ

玩具はさう車を賣る祭典は日向まほしき四ツ里佐波

系所は高き心あり楳原社といふありその中車場のあり

北多戸郡
建武天皇
紀元應
會見前及
府中
追記

日向
車
の
神
社

大正六年十月十日
日向の
祭典
祭典は日向まほしき四ツ里佐波
系所は高き心あり楳原社といふありその中車場のあり

未だ歳歳
お常病の来
お常病の来
お常病の来

脚女性

供
下
敷
之

とあ

の新編の流木の目録は数回あり

三徳のキリこまの創れの井野太夫の足立を尋ねて

奉行とあるは伊賀衆の足立とあり

是は三、ありしゆえの足立とあり

七つ、ありしゆえの足立とあり

斗、ありしゆえの足立とあり

わ、ありしゆえの足立とあり

銅製、総筒あり

銅、屋敷の銅の破片を川形に

巻し軸四本一本あり

あ、銅筒の破片を川形に

し、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

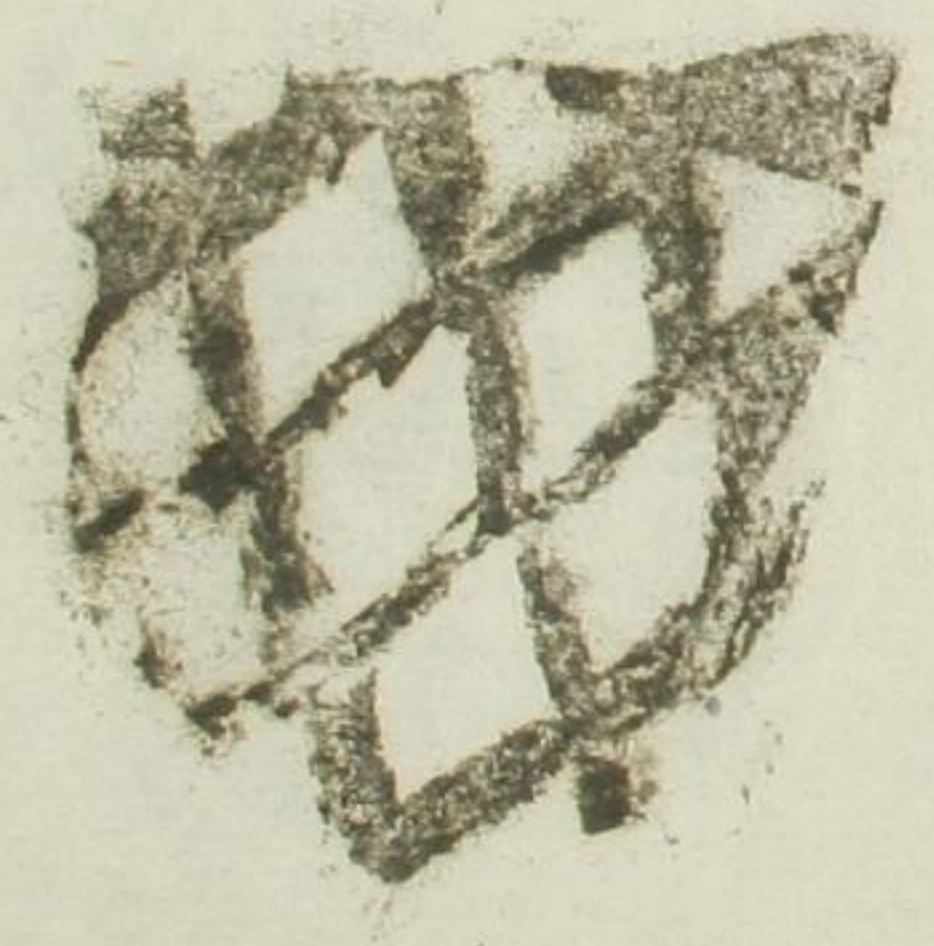
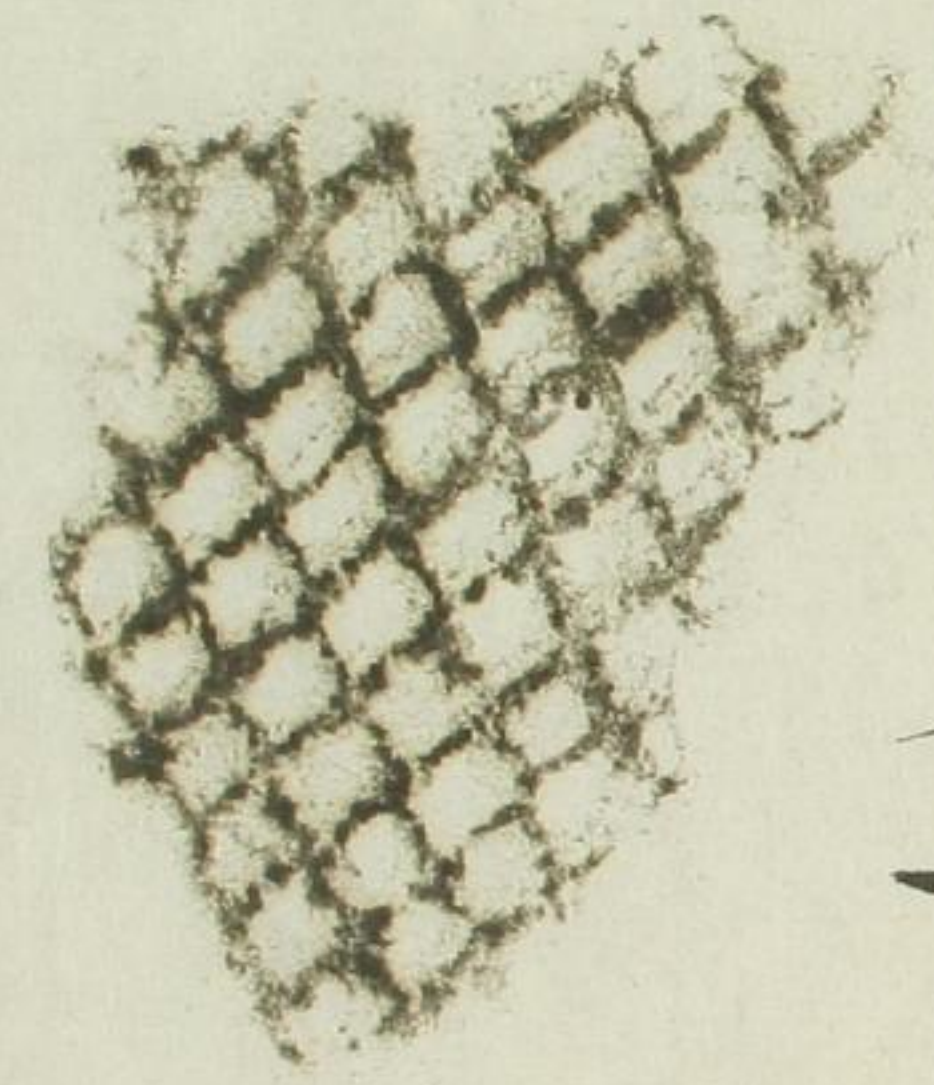
あ、銅筒の底は銅

あ、銅筒の底は銅

武蔵國造の所領ありて...
 は古言のありて...
 の如く...
 沙石の...
 塔...
 文徳...
 神...



京砂
 所出
 古瓦
 二片



京砂...
 應永二年...
 京...
 瓦...

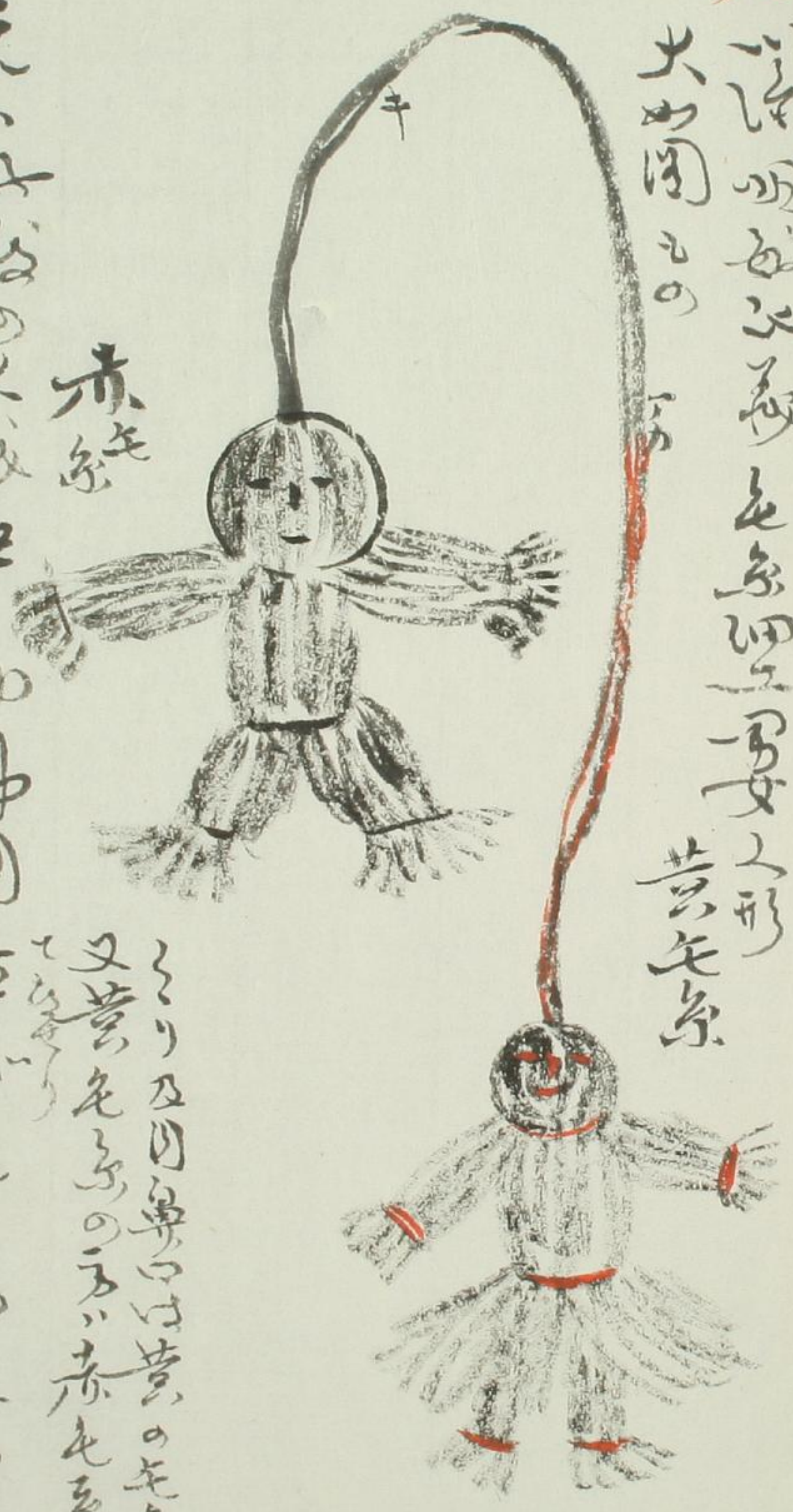
大のしんじゆ

ちんじゆをまきつりてモイカイトつるこ
 池の邊つりていとくると信じてつる
 すけの信せし果てぬまはもいふ
 は解をつりてまてぬまはもいふ
 に當るものあらぬ解はくるまてぬまの
 大のしんじゆのしんじゆ

デンデンムシく月ガセヤリヨダセアチヤマダセヲノ
 目玉ハドコ行ツタ出サイト山へ行ツラ
 ルゾ(大のしんじゆ)
 月ガセマカレハセして
大のしんじゆのしんじゆ
 大のしんじゆのしんじゆ

佛兵のしんじゆ
 大のしんじゆ

いふ明はと夜とをいふ女人の形
 大のしんじゆのしんじゆ

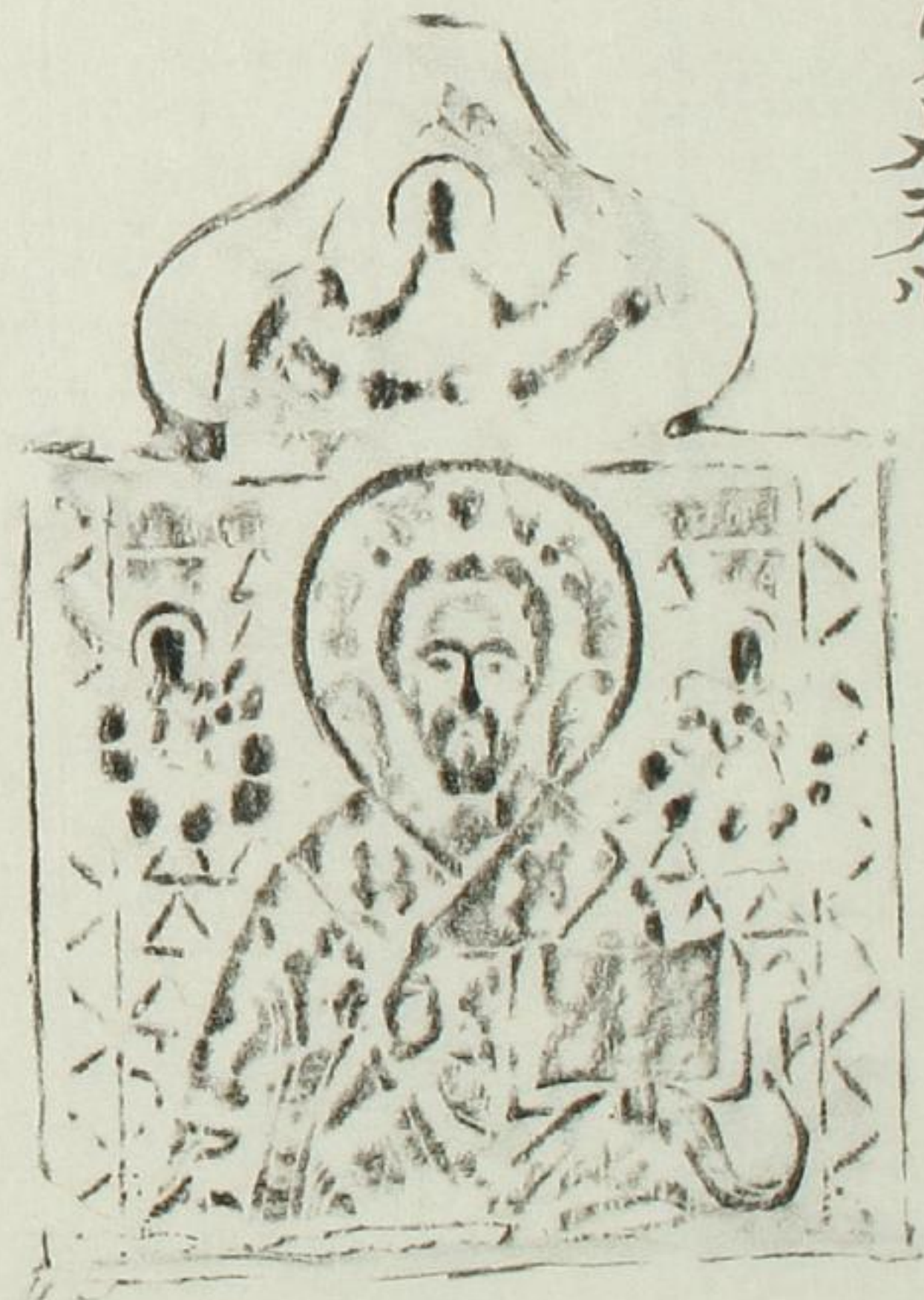


えいみの大のしんじゆ
 大のしんじゆのしんじゆ

又此のしんじゆのしんじゆ
 大のしんじゆのしんじゆ

雲の持る
守りメダル

こしや雲の持る守りメダル



塩釜の
ととの解説

塩釜甘巻句

塩釜街道に白菊植て何とさくへマリヤたよらさ
千賀の浦見牙にしめかたうあしあそマリヤ
東の忍ぶすまかけまへの中のはのマリヤのまじり
サアサヤツラサとの出す船は命まよとかけマリヤ
塩釜出る時ア大おんづよ奏社の宮からマ物や浪枕
社へ信で奏可を待て出る後まのまののまののまのの
と昔の女客のまのまのまのまのまのまのまのまの
れとよりの見のまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

多智城の碑
燕の碑
所在地

支倉常長墓
政國と云ふ
三ノ初子の墓
國守の墓
等の所在地

武藏野開墾
年代

多智城の碑と名も停車場より東に里邊に街道の
市川村多智城あり燕の碑は名も村に在り
支倉常長の墓あり昔常長公の墓に是明と云ふ
りあり政國といふやとの墓と云ふあり
國守の墓あり堂あり城野東本陣あり木の下あり
と云ふ以上皆墓の所なり

武藏野開墾の事古くありて其妻は徳川幕府十八
年二月二十三日辰武蔵野開墾の事
開墾の事古くありて其妻は徳川幕府十八
年二月二十三日辰武蔵野開墾の事
開墾の事古くありて其妻は徳川幕府十八
年二月二十三日辰武蔵野開墾の事

湯田の名称

訖就之可被懸上多摩河川之向可為犯土
家河川之勢可為犯土
湯田川の名は就一説あり更科日記に武蔵と云ふ
中にあるとあり

本新橋字鏡に崩岸也と云ふ
礼又河須の詞を載せり
受乃字敬爾とあり
見ゆる詞をれば古くより
東の方言をいと思はる

鏡造の語

此語を念ふに... 鏡造の語ニツラヤニニタリ...

なまの... ちまもの

後大志院の... 三輪の... ありの浦に...

ちまもの... (重祿天皇頃...)

おとしの... ちまもの

黒田... の... 天の... 三場所... 本郷... 賽神と...

本郷... 重祿

○... ○... ○...

新田の里塚
 冷泉の里塚
 及成草の古塚
 の話

家かよひしりて
 思ふは海流の
 流るる水は
 流るる水は
 流るる水は

今も此の里塚
 今も此の里塚
 今も此の里塚
 今も此の里塚
 今も此の里塚

あつたはしりて
 思ふは海流の
 流るる水は
 流るる水は
 流るる水は

この角ありなる今の堂の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、

此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、
此の木の、

杉、
松、
檜、
榎、
樟、
楠、
栗、
柿、
梨、
桃、
杏、
楓、
柳、
杉、
松、
檜、
榎、
樟、
楠、
栗、
柿、
梨、
桃、
杏、
楓、
柳、

足利の草の生すに
は伊勢の草の生すに
似る

赤前の末社に
押子の末社

大心寺の末社

考まて三枝九葉草と稱す今ある草の生すに
は伊勢の草の生すに似る此の草は疑草と稱す
下野足利の俗言に伊勢の草と生すに決するもの
考入伊勢の草の生すに似るの草を生産せしめ
草の生すに似るものを生産せしめ生産せしめ
姑に姑の方をゆえとふも是利の草の生すに
下野赤前の神社の末社に押子社といふありと
古く赤前の社の印と稱めたり社なるに古くは
すといふに赤前の社を考ふるも赤前なるに
大心の草の生すに似るものを生産せしめ
大心の草の生すに似るものを生産せしめ
大心の草の生すに似るものを生産せしめ





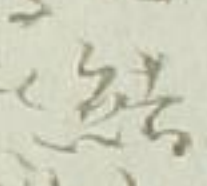
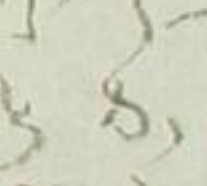


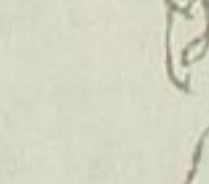
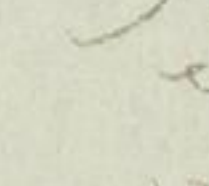
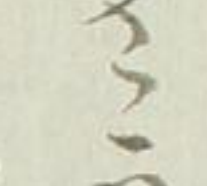
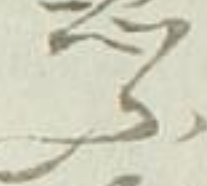
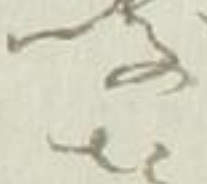




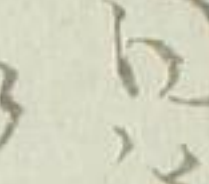

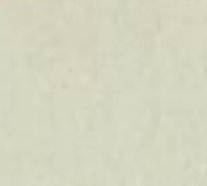
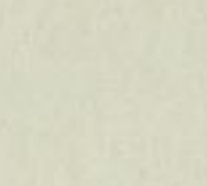
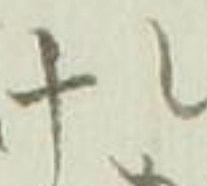

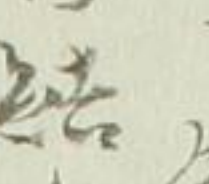
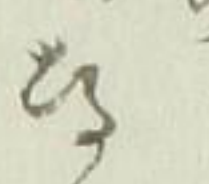






大心寺の末社
七不思飯

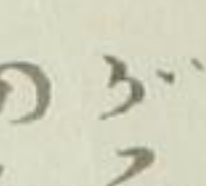
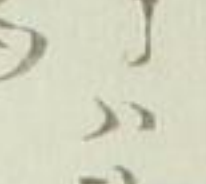



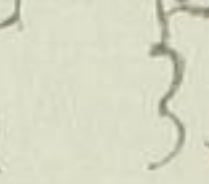


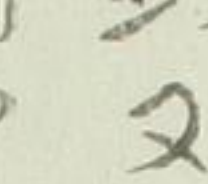
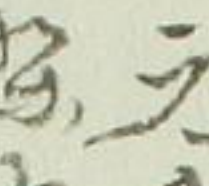

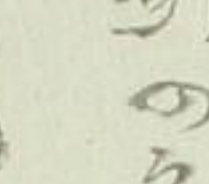







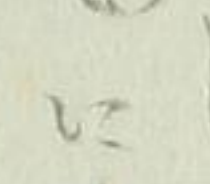
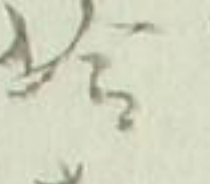

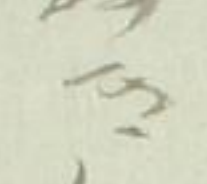

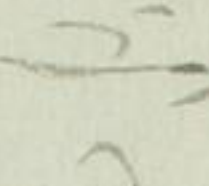
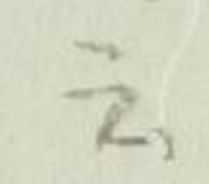

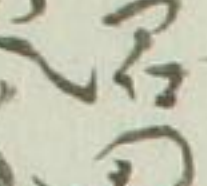

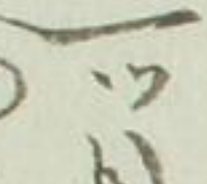

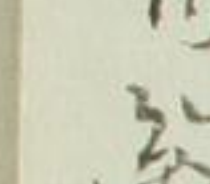
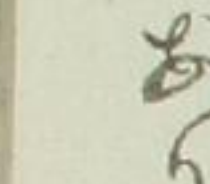
大心寺の末社の七不思飯
一、宝塔の末社の末社
二、色連の末社の末社
三、色連の末社の末社
四、色連の末社の末社
五、色連の末社の末社
六、色連の末社の末社
七、色連の末社の末社
八、色連の末社の末社
九、色連の末社の末社
十、色連の末社の末社
十一、色連の末社の末社
十二、色連の末社の末社
十三、色連の末社の末社
十四、色連の末社の末社
十五、色連の末社の末社
十六、色連の末社の末社
十七、色連の末社の末社
十八、色連の末社の末社
十九、色連の末社の末社
二十、色連の末社の末社

娘の教を釘書せ用の事... 三力岡屋の如き器物を作せ...

娘の教を釘書せ用の事... 三力岡屋の如き器物を作せ... 又結いのツ...

共
の
の
の

實例の通り、一目結と釘巻との別、 回、 回、
 と平との通が、一目結、 回、 角の下の目、
 歌を直すと、 回、 回、 回、
 實例通り、 回、 回、 回、
 共、 回、 回、 回、
 ぬき、 回、 回、 回、
 が、 回、 回、 回、
 しが、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、

か、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、
 針を、 回、 回、 回、

小まき釘ハヤット
コ條の釘ぬき
しぬけしむた
釘ハコま釘
ぬき
かぬ也船工仕
下所コまに推
七知少コまに推
者コまに推
コまに推

角五七下に向けたり平線ありて釘ぬきのみ角七
二下にもすとのあぶり一線ありて角七の角度より
て釘ぬきと一線別ありて解せぬをなり
元身釘ぬきの形より釘ぬきと文記されしか元身釘ぬきの
釘ぬきの形より釘ぬきと釘ぬきと釘ぬきの形より釘ぬきの
見聞造家然い

三日程釘抜

三日程 十二月結等の
三日程 十二月結等の

元身釘ぬきの形より釘ぬきと釘ぬきの形より釘ぬきの

琉球の糖業

糖業の出地

應永十八年の
曆

琉球の糖業の出地は慶長五年琉球の琉球を
攻たりて甘蔗の交生しありて天和九年琉球尚書王三年
村を福建に到りて製糖の法を傳ふと云ふ而して
四年尚書王のめりて重要なる物なりと云ふなり
糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り
琉球の糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り
琉球の糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り
琉球の糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り
琉球の糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り
琉球の糖業の出地は琉球の何れに在りて造るは造り

下石知事河田より叙り應永十八年の曆あり
應永十八年乃こよ元かのとのりて此と
きりて此と八十三日

東叡の實永寺
創立年代

カシガリヤサ
ヒヨ

駿河板大蔵經

朱齋水持来
の書帯草

鐘倉古鐘
の年号と
寺流の名

左内必方ヨリニシバトシヨリニ蔵

東叡の實永寺の創立年代明りニ載の正數也トモ天
内傳のヨリニ申コトヲモテ東叡ニ立王ニ誕生シテ
ラアルニ又アリ又實永寺ノ境内ニ立王ニ誕生シテ
コトハ元和九年の比トモシメテ元和九年ニ
トノコトモシメテ
元和九年の比トモシメテ元和九年ニ
トノコトモシメテ
元和九年の比トモシメテ元和九年ニ
トノコトモシメテ

駿河板大蔵經
ハその書トシテ字數ハ八行十七字なり實永寺に

朱齋水が破國ト持来しと書帯草今にその種
トシテ水戸下布在常照寺にありと以テ
父根ヲ持来しと書帯草今にその種
トシテ水戸下布在常照寺にありと以テ

壽福寺	浄妙寺	平野寺	龍華寺	本覺寺	鐘倉古鐘
慶安四年	承應二年八月十九日	永仁三年	天文廿五年五月	元和九年	戸永十七年
浄智寺	高松寺	長勝寺	祢名寺	海蔵院	常樂寺
慶安三年	寛文十一年	正安六年	正安六年	寶治二年三月廿日	戸永十年

出づりてはつづりて天道の宮へ馬を遣はりて
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に

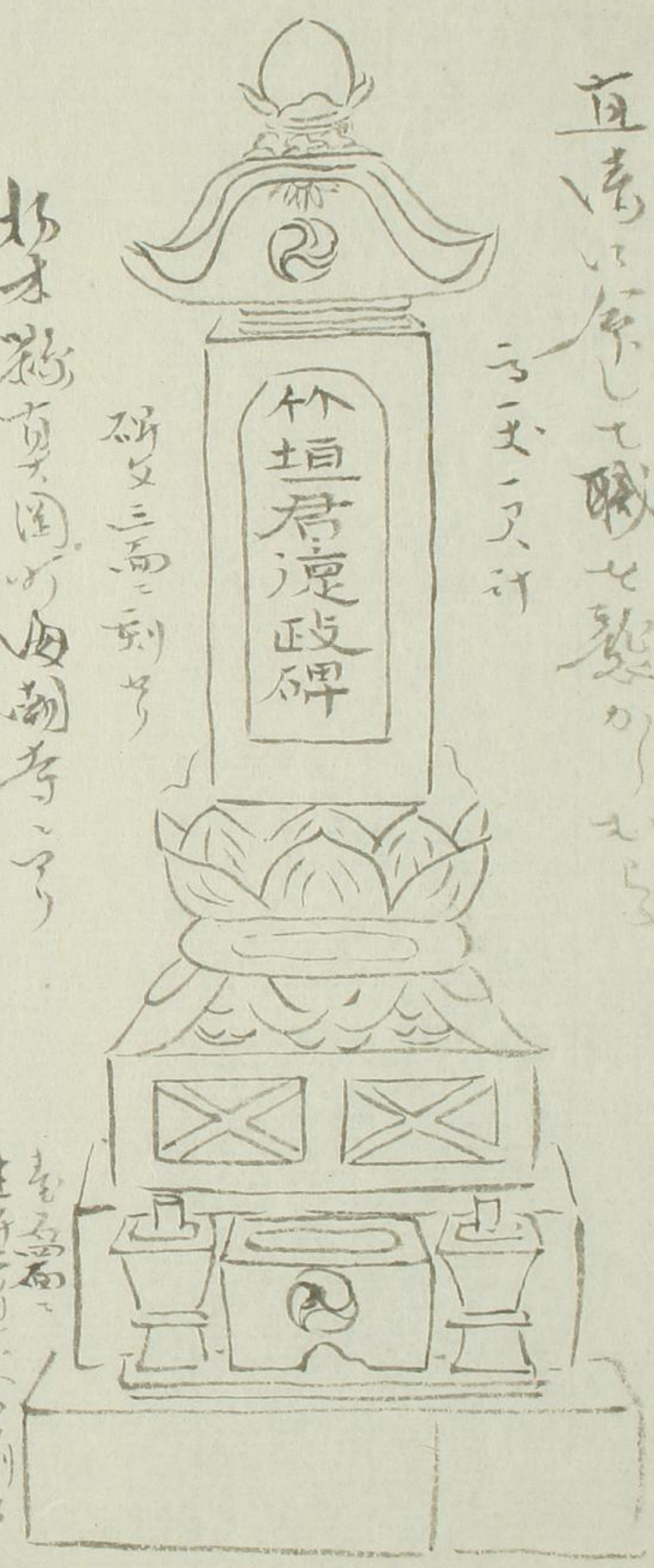
大御八劍大明神 伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に
神光赫々として
龍鳥忽然と必に
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に
中戸村久丸大明神
伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に
伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に

御侍の御

昔の村山王伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に
上野村首大歌神
昔の村山王伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に
大蛇を祀りて
和の月見侍に
大蛇の中へ
入る御の犬我を
其後大の忠信と
感じ首尾
而社に祀り
下野村尾
大歌神あり
想の尾村
大歌神あり
長篇の御
所なり
國府村
大歌神あり
伊弉諾大神の御
降りて人に教ゆに
其の葉を枝枝の間に挿枝と云ふ也
其共多く人に

直清に原して職を授けり

三十一尺計

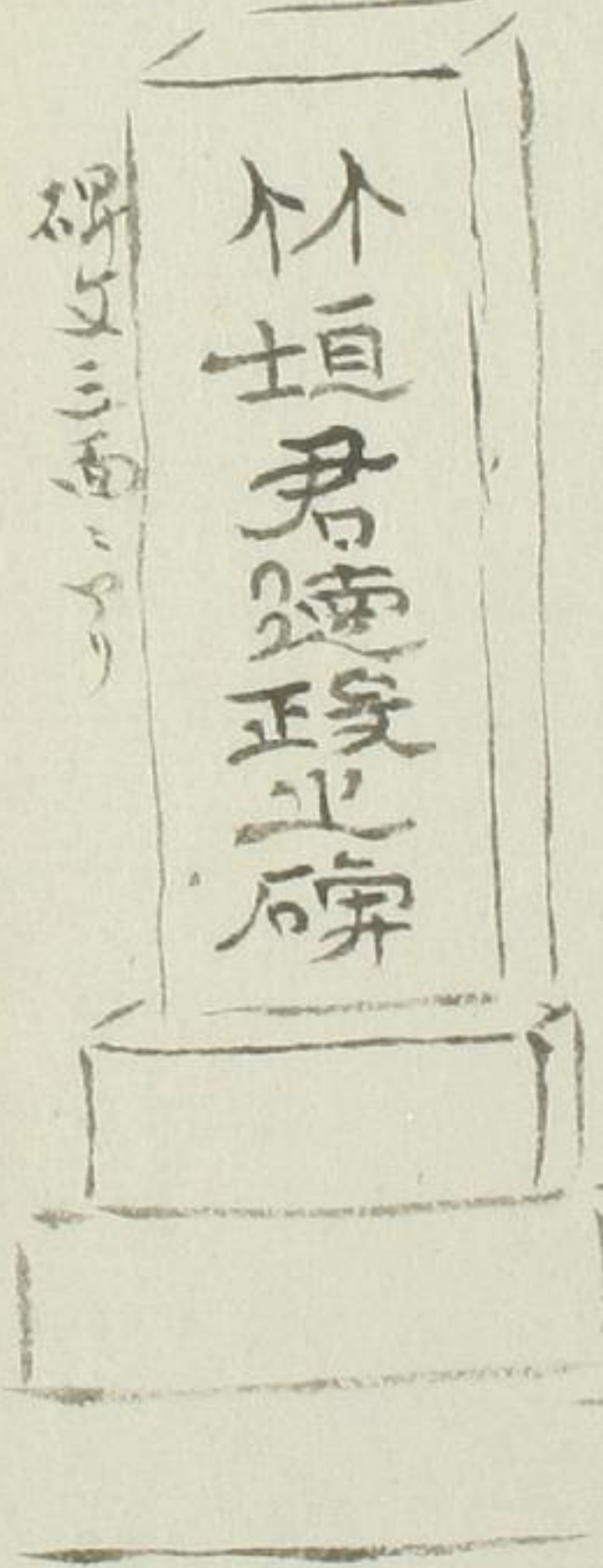


碑文三面に刻り

竹垣君澄政の由緒考

石の形を
建所考明たし名を刻す

金村別雷神社
竹垣翁の徳之碑



碑文三面に刻り

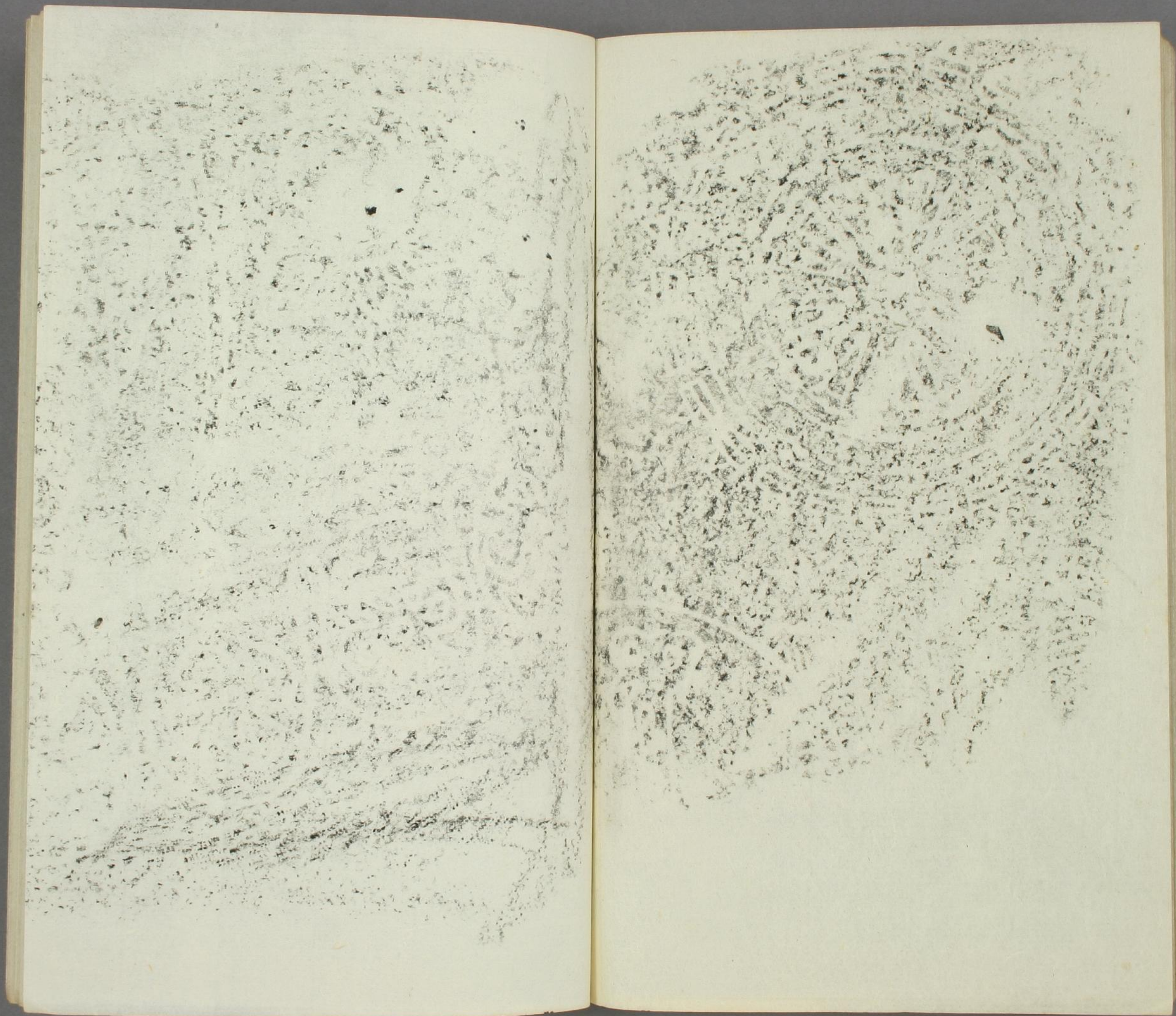
竹垣君澄政の由緒考

園田清由流泉京實政二年甲寅十一月常陸五郎の代官と
なり其疾を以て職を請ふとすや此は其任を懇願し
聴かせしに及老中伊豆守信明に教諭して借るを乞ふ
身しかは止むを強知事四年を延期し其決心の定む
治すを廣く文七年清由の為に生祠を建つるに由り
是清由の生前の功の由りて其碑元は茨城縣常陸國筑波
郡鹿島郡安山下の園田の郷に於て建つるに由り
日大明神に刻せり生祠は我々に於て古来其例甚稀なる
然るに其建祠あるを見れば清由が大に民政に成功あり
感せしめしむるに足り其地に於ては其功を後世に傳へ
一日文十三年即ち清由歿す年に村に碑を築敷り其功を
即此に記す可也距二里余釣形寺(時)境内に建つる感恩の石

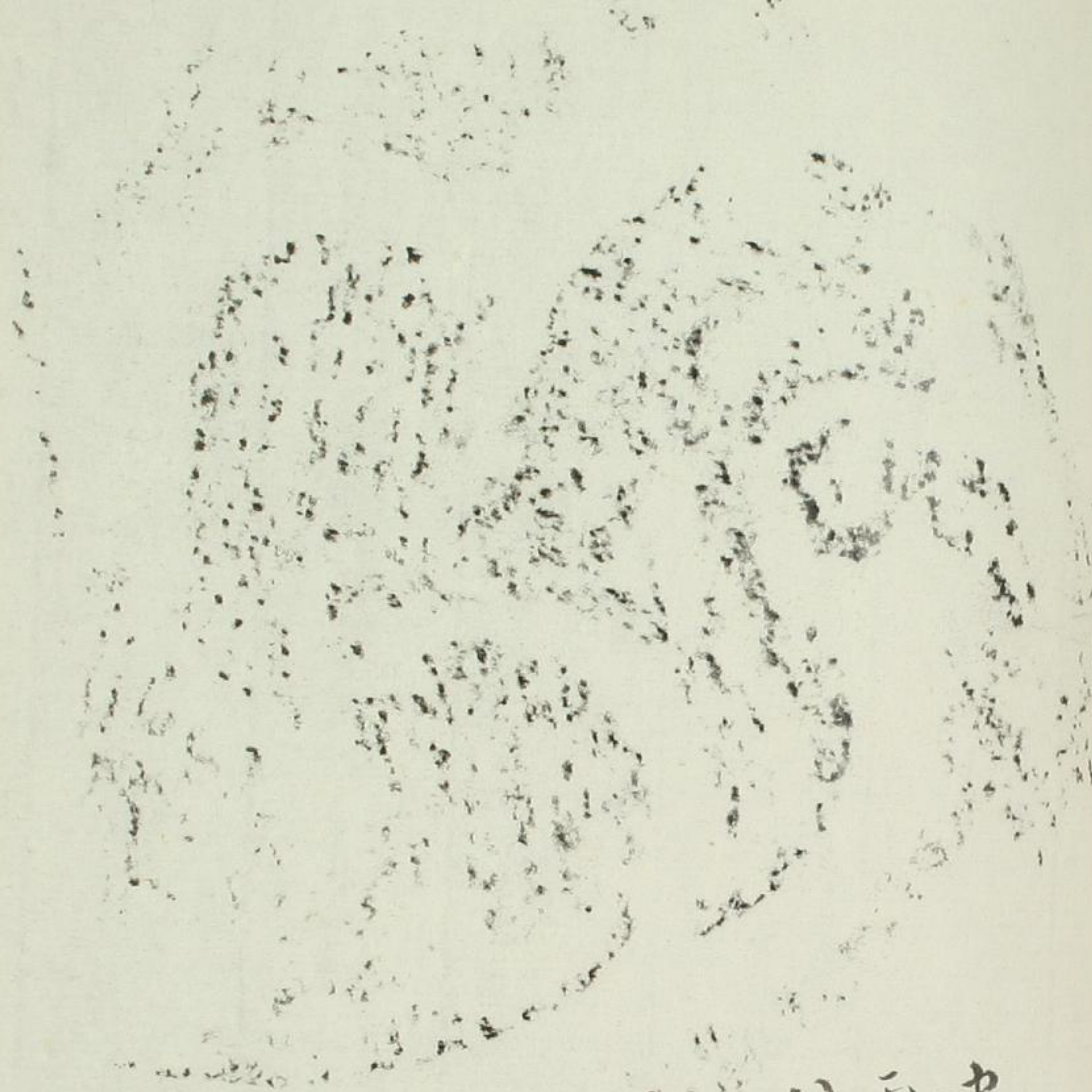
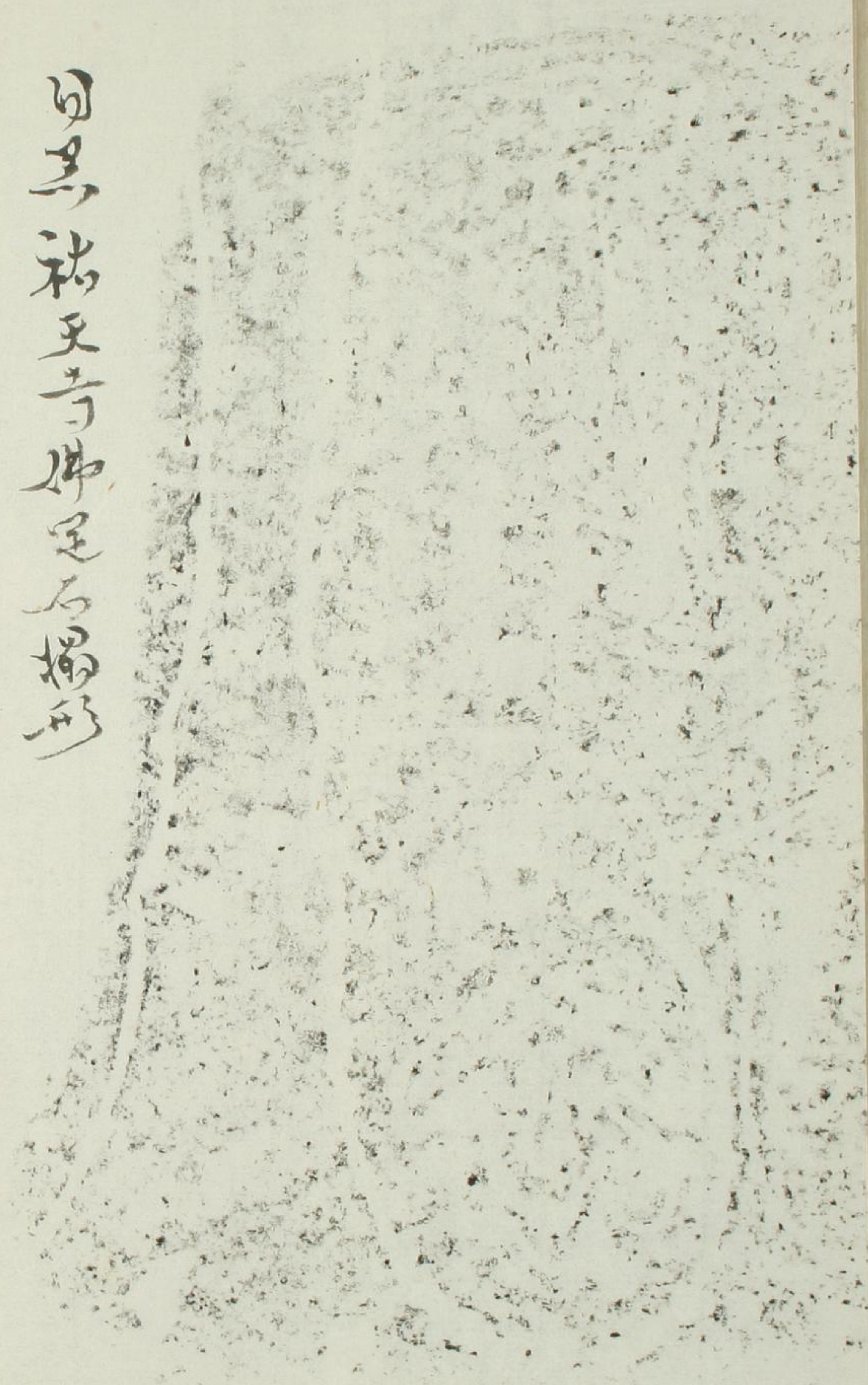
と表せり一は筑波郡高野町の南二里許板橋村大字板橋
不動院の境内にあり天保四年七部十七郡百廿二村の邊に
一は常陸彰功の碑にして君師一人受一教惟古之道を然故
今尚因君蓋有志茲此云々とあり一は箱根郡根本村
即治口三浦所と龍溪所との間鎮守神明主境の石祠は
唐破瓦形の屋内に白帶をきて其真壁に因田大明神の書
を彫りて元天保七年丙午の歲に毀後十八年丁未の歲に
村之今尚歲時より拜念らず此は真壁郡中野村大字寺
上野字中庄の屋梁寺址にも切徳碑あり文板橋碑を
刻し真壁筑波郡等の長官より下賜の恩を謝したる
とす
以上は三ヶ所也、乃 三ヶ所、より如地見及國の東の切徳謝恩碑とす

目録
記
三

大正六年十一月廿五日、予が左のよう、武蔵野会館に於て、
座敷に於て、感念の詞を述べ、
予が、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、



日本天寺佛足石搨形



中日天寺佛足石搨形
正覺寺一尊大側
村社寺所
廣中塔
刻也
刻也
搨形

原申路三基寛文七年とありてあり
日黒行入女と爲變名の四家あり昔家康公の火事
左の因縁ありてはまの申候にそのゆゑを
後四の家が又教宗をともたむ教の景井の垣の
とこらにたしし家ありしが今又當らる
前記せし秘天の事あるの長銀をともたむ教の垣
青高より教宗を三津の教ありしが明正世年
十月より本村繁宗とゆりあしぬの事あり今も
年七月と廿一年過つたるが画工の文に教の垣
又大島津江の社に寛文二年の古碓の石塔原申
塔の二三ありしが今又見當らる
其必後すともも又切由をせし

寶形を焼く女に就て其書ののすゝめは
如く一尺男三一尺の焼女といふ
鞍馬山に誘はれて一原といふ野を行けば尼持の教宗夢遣い
の精の礼寶形を獨於せきと免ち豆寄より廊を
入て
徳島の丸に宝形を焼くことを夢ぶるの日のゆゑに
いふことあり節々の夜の夢を初夢とあすを理に叶
とす
近世事物考に宝形遊にいまは跡地日にせしなり
句ありては舟ありては舟ありては舟ありては舟あり
福にのびては舟ありては舟ありては舟ありては舟あり
福にのびては舟ありては舟ありては舟ありては舟あり

香子は芭蕉のゆかりにみせしむるはゆかにあたる
正月のまじりたるにや
山家集の而行法吟の歌「五春の朝よみける」年々
春くしとは思ひぬにまじりてかふる初夢
神代館波下 當世正月元日朝とくむ子の終
を言て元日の初夢の下にば 初夢に言ふ
二日の境ひまを 初夢と思ふ 初夢は元日の初夢なり

不意文庫書譜に正月に用ゆる玉子の名はりのり

丸とまじりたるは初夢の玉子の名はりのり
大改りたるは初夢の玉子の名はりのり

香子のゆかりにみせしむるはゆかにあたる
正月のまじりたるにや
山家集の而行法吟の歌「五春の朝よみける」年々
春くしとは思ひぬにまじりてかふる初夢
神代館波下 當世正月元日朝とくむ子の終
を言て元日の初夢の下にば 初夢に言ふ
二日の境ひまを 初夢と思ふ 初夢は元日の初夢なり

香子のゆかりにみせしむるはゆかにあたる
正月のまじりたるにや
山家集の而行法吟の歌「五春の朝よみける」年々
春くしとは思ひぬにまじりてかふる初夢
神代館波下 當世正月元日朝とくむ子の終
を言て元日の初夢の下にば 初夢に言ふ
二日の境ひまを 初夢と思ふ 初夢は元日の初夢なり

香子のゆかりにみせしむるはゆかにあたる
正月のまじりたるにや
山家集の而行法吟の歌「五春の朝よみける」年々
春くしとは思ひぬにまじりてかふる初夢
神代館波下 當世正月元日朝とくむ子の終
を言て元日の初夢の下にば 初夢に言ふ
二日の境ひまを 初夢と思ふ 初夢は元日の初夢なり

根岸の行状

江戸時代の
内職

根岸の行状の通に根岸二段ありといへば長寛三年
十一月廿二日通喜祥の通一は應永九年壬午。律令
三舞とありといへば、
江戸時代内職と有るは、
所々、
竹の如く、
下町の火提灯を懸せし、
火提灯が、
此等、
本あり、

ていへば、
計七、
根七、
世七、
内職、
内職、
長寛、
世七、
茶花、

大正九年一月の是古倉出の百人一首歌七名に於て

諸國名新和歌百人一首 貞亨三年及大本 京師甥

小倉百人一首 元禄六年及 京師四修吉田才兵衛 大本

職人君道比百人一首 享保 道比及曲田画 中本

とくけり百人一首 享保 道比及清春画 中本

道比百人一首 安永 道比及房信画 中本

道比百人一首 天明 道比及

真歌歌集とくれ百人一首 享和四年 歌集板

以三林若若之哉

海交百人一首 天保十二年 黒川初馬画

百人一首古今和歌集 天明七年 敏盛 三浦画

新撰和歌百人一首 文化 敏盛 北溪画

和歌百人一首 重政画

和歌弄花集百人一首 寛政三年

和歌書讀方和歌百人一首 馬吉柳花画 寛政三年

和歌百人一首 一名百千鳥 天明老人 唐重 寛政三年

和歌百人一首 文三合解子丸 是国画 二編

和歌百人一首 妙好本 岳亭定国 寛政三年

和歌百人一首 片岡雪子画 寛政三年

和歌百人一首 梧桐梅明三光国画 寛政三年

和歌教訓百人一首 錦江亭 景嵩 天明六年

時歌集多一首

加越能多人の好歌と道邊に或は天保年間
其の歌多し序文西南宮様

陸奥百歌集

千柳亭

文政二年

道比多一首

美者不明

小冊

想奇芝居百首

三馬亭

練波亭

小冊

愛國及權演說家百家撰

谷住孝悌等以書言也
天保三年

日左傳人多首

以上野海舟
天保三年

此出也

列女百一首

弘化四年

藤亭川柳

秀雅多一首

前示三年

日

續英雄多一首

同二年

日

新編歌仙多一首

前示二年

柳下亭種貞

義烈多一首

日五年

綠亭川柳

贈若多一首

日二年

日

仙人百家撰

安政二年

日

花街多一首

日三年

日

武藝多一首

不明

不明

也世歌多一首

明治二年

高島藍泉

現今英多一首

日十三年

真亭亭

明治英多一首

日十四年

安井工熊

近世名婦多一首

日

園田霞翁

國會議員百首 天保六年 伊東洋次郎
仙風獨白百人集 年代不明 川柳
芝居道化人一首 天明三年 三馬
あつこる首 年代不明 赤巻

道化人一首 天保四年
三味線歌者一首 天明四年
以上矢野の撰歌に出る

忠孝一首 不明
和漢一首 安政四年

六好八種の長崎に出る中、アハハ略す
以上大塚徳笑に出る
小倉の友人一首 妙り 天明五年 七十五歳 受賜

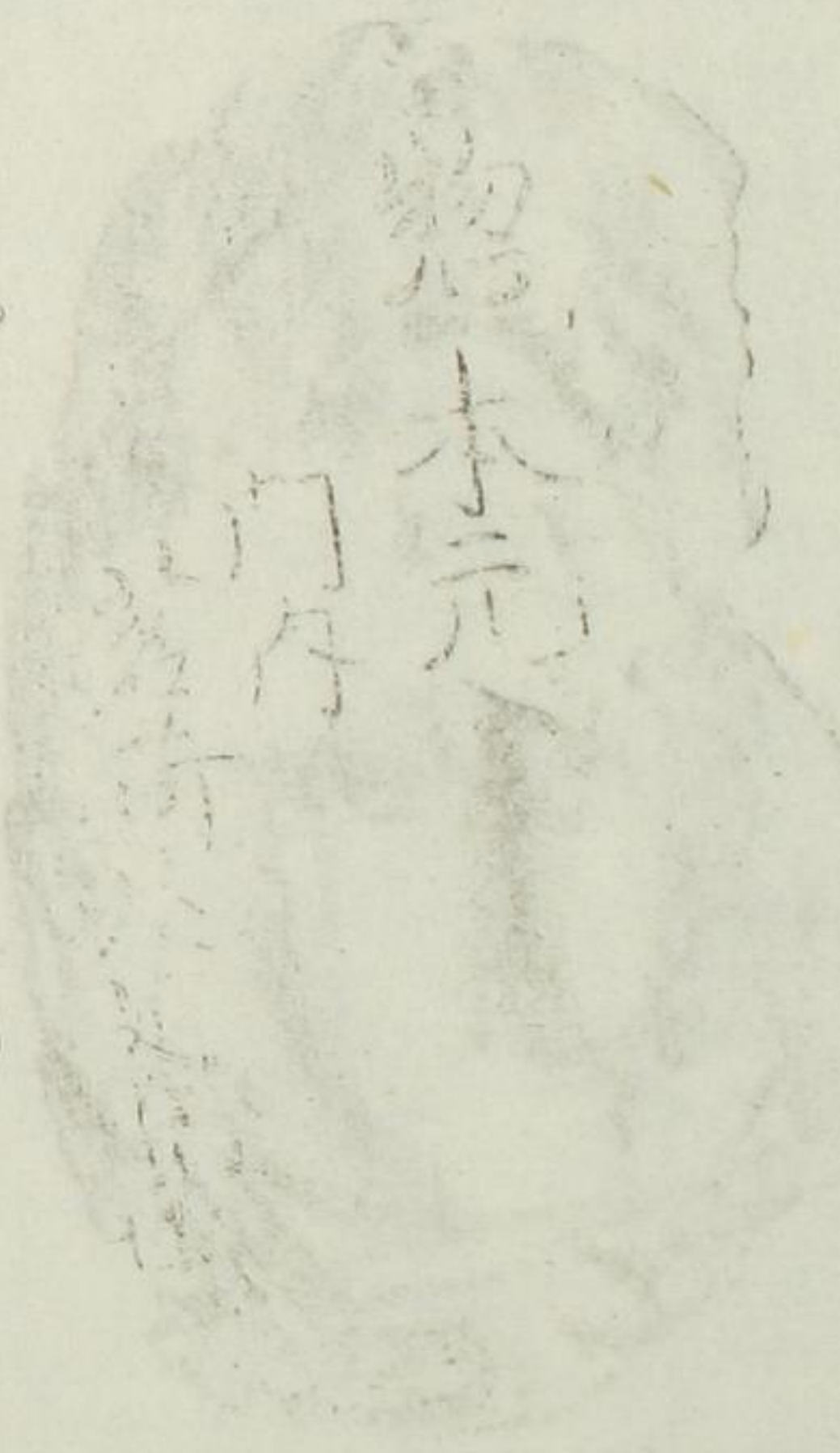
於寺多一首 都々連の帯 天明八年 出及藤原重浪

都々物一首 谷多 玉女子遊
その一と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき

以上室井平蔵に出る
其の二と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の三と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の四と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の五と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の六と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の七と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の八と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の九と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき
其の十と記す 秋の雨のうらみ 七葉のつゆ ぬき

七葉のつゆ
日録三十七
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ
七葉のつゆ

此書の記述は、
たゞの歴史を記すに止らず、
その時々の政治情勢や
人物の行状を詳しく
述べ、その後の歴史に
大きな影響を及ぼした
出来事や人物を詳しく
記述している。特に、
その時々の政治情勢や
人物の行状を詳しく
述べ、その後の歴史に
大きな影響を及ぼした
出来事や人物を詳しく
記述している。



此書は、
その時々の政治情勢や
人物の行状を詳しく
述べ、その後の歴史に
大きな影響を及ぼした
出来事や人物を詳しく
記述している。

共古日録三十一
目六十一



Handwritten Chinese calligraphy in cursive script (caoshu) covering the entire envelope. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional Chinese correspondence. The characters are dense and fluid, characteristic of the cursive style.

